

白桃の供給力強化優良事例集

平成 30 年 3 月
岡 山 県

目 次

| | |
|----------------------------------|----|
| 白桃の供給力強化に向けた取組について | 1 |
| 岡山市一宮地区 | |
| 園地の大規模化と研修ほ場設置 | 2 |
| 個別経営体の取組 1.5ヘクタールの生産基盤を目指して | 5 |
| 岡山市・赤磐市（JA岡山東モモ部会管内） | |
| 晩生品種「白皇」導入による連続出荷 | 6 |
| 倉敷市玉島北地区 | |
| 園地整備による大規模化とももの高品質生産 | 8 |
| 美作市・勝央町 | |
| 既存ストックを有効活用したもも研修ほ場の整備 | 10 |
| 新規就農希望者の窓口について | 12 |

白桃の供給力強化に向けた取組について

1 はじめに

県では、白桃の供給力強化のため「白桃の供給力強化緊急対策事業」により、ももの生産対策と担い手対策をあわせた産地の取り組みを支援する岡山県独自の事業を実施しています。

この事業は、新規就農者の受入計画を有する産地が、農地の貸付希望や担い手の意向を反映した「園地マップ」を作成し、新規参入希望者や後継者にはほ場継承を促す取り組みを実施するとともに、大規模経営を目指す産地の品種構成の見直しや簡易な園地整備、機械化による大規模化、異常気象対策などの取り組みを支援し、産地の規模拡大を目指しています。

本事例集は、供給力強化に先行的に取り組む県内もも産地の効果的な事業活用や創意工夫あふれる取組について、各地域の背景からわかりやすく紹介することで、他地域の農業者や生産組織、関係機関の今後の産地の発展に向けた取り組みの参考となることを目的としています。

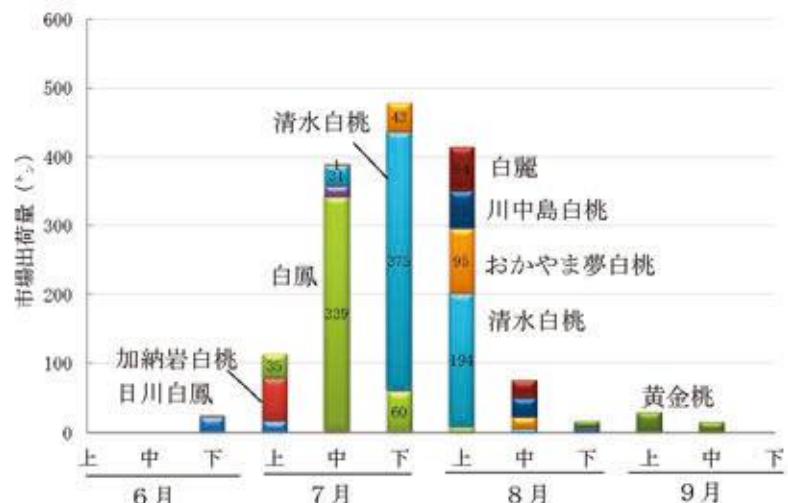
2 白桃の供給力強化緊急対策事業メニュー

- (1) 生産対策： 品種構成対策、農地の確保対策、省力化対策、異常気象対策
- (2) 担い手対策： 受入体制整備、研修ほ場設置、農作業支援体制整備

3 本県のもも生産の現状

本県の品種構成は「清水白桃」に集中しており、高品質でブランド力の高い県産もものイメージが定着した反面、出荷時期や労働が短期間に集中し、戸別経営面積は小さく、県全体の供給量は長期的に漸減しています。

一方、首都圏や海外等の大消費地を中心に、高品質な県産白桃の供給ニーズは高まっており、全体出荷量の増加と、「清水白桃」以降の晩生品種の供給力強化が本県もも生産の大きな課題となっています。



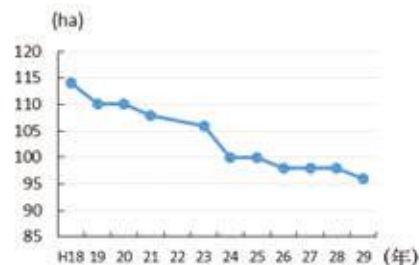
岡山県産ももの品種別市場出荷量
(2017年産 全農岡山県本部実績)

岡山市一宮地区

園地の大規模化と研修ほ場設置

【地域の概要】

一宮地区は古くから果樹栽培が盛んで、もも、温室ぶどう、なしの複合経営が主体の地域です。特に本県の代表品種である「清水白桃」の産地として発展しました。昭和30年代から畑地造成、かんがい施設や農道の整備が進み、産地基盤が完成しました。JA岡山一宮選果場果樹部会もも部は一宮、津高、高松、足守の4地区からなり、平成29年12月時点の農家数は350戸、栽培面積は95haです。



もも栽培面積の推移

(一宮選果場果樹部会もも部)

【新たな取り組み】

かつてはガラス温室で高級ぶどうの「マスカット・オブ・アレキサンドリア」「グロー・コールマン」と贈答用の「清水白桃」の複合経営による小規模経営が成り立っていましたが、温室が老朽化した小規模なぶどう部門を縮小して、もも専作農家になる動きが出てきています。一般的にもも専作に必要なとされる経営面積1haを目指すためには、園地の集積と機械作業による省力化や作業効率の向上が必要ですが、耕作放棄地で灌木が茂っていたり、機械作業が困難な傾斜や段差があったり、ほ場が分散していたりと、条件の良い園地の集積が難しい状態でした。また、産地では高齢化とともに生産者が減少し、耕作放棄地となる園地も増え始め、このままでは、産地が縮小することは明らかでした。そこで、地域の後継者だけでなく新規参入による新規栽培者を確保するため、平成28年に地域で協議を重ね、部会で積極的に新規参入者を受け入れる体制を整えましたが、新規就農者が地域に定着し、もも専作農家として自立するには、少しでも早く園地を確保し、産地として新規就農者のための園地の確保・基盤整備の取り組みが必要になってきました。



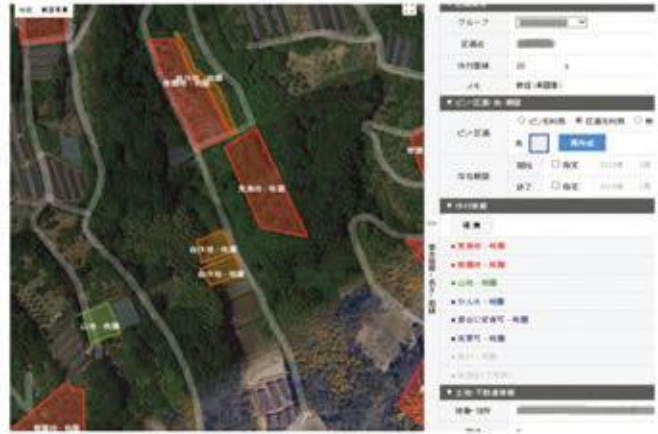
園地規模が小さく、傾斜や段差もあり機械作業に不向きなほ場が多い



地元農家と研修生、JA等の関係者が何度も産地の将来の姿について協議を重ねた



大阪や東京での就農相談会の様子



園地マップ「アグリノート」の整備

【研修ほ場の設置と担い手の受入】

平成 29 年度から新規就農を目指す 2 組 3 名が、農業実務研修（平成 31 年 3 月まで）に取り組んでいます。部会では、研修生のスムーズな技術習得と就農及び将来の経営規模拡大を図るため、急傾斜で細分化されていた畑や作付け予定のない水田等 12 園地を 3 つの大区画にまとめたほ場を整備し、もも栽培の実践的な研修を進めています。

また、ばらばらだった園地情報を関係者で共有するため、農業委員会の「農地ナビ」をベースに園地情報を集約した園地マップ「アグリノート」を整備し、農地の流動化に向けた取り組みもスタートしています。園地の貸し借りや、小規模園の境界を無くす改良は、地権者や地元生産者組織の様々な意見の調整が必要でしたが、地元農家の尽力により、地域の意識改革と意見集約を実現しました。

【概要】

メニュー 研修ほ場の設置（担い手対策）

事業主体 （公財）岡山県農林漁業担い手育成財団（岡山県農地中間管理機構）

工 種 雑木や古い樹の伐採、緩傾斜化、土壌改良、苗木植付等（11,877 ㎡）

労働力 55 人日

費用 1,376 千円 バックホー（75PS、120PS）2 台、ブルドーザー（75PS）1 台、ダンプカー（1 t）1 台の借り上げ、草刈機 2 台、チェーンソー 1 台、種苗費等



急傾斜の古い果樹園



地元先輩農家と研修生が受託して施行
（研修生は、ほ場整備技術を習得）



作付け予定のない水田（整備前）



水田転換では排水対策を徹底した（整備中）



完成間近の大規模研修ほ場
(機械化に対応できるよう大区画で勾配を緩くした)



苗木の植え付けの研修
(左：受入れ農家、右：研修生)

【取り組み後の状況と今後の計画】

地区内の後継者だけでなく、外部の意欲ある就農希望者にも就農への門戸を開き、就農相談会等を通じて、一宮のもも産地を知ってもらうことで、継続的に産地の若返りを目指していきます。産地の魅力とももの供給力をアップさせていくためにも、既存園地の大区画化や改良に加え、荒廃園地についても灌木の伐採や抜根により新規作付けが可能な状態にした上で、園地の賃借、流動化を根気強く進め、生産者の栽培面積の拡大や就農希望者の農地確保に取り組んでいきたいと考えています。

【地元の声】

研修ほ場の設置が目に見える形になり、産地の取り組みが内外に伝わることはとても良かった。特に地元の農家の方が、このような担い手育成に向けた新たな動きに関心を持ってくれるようになったと感じています（一宮選果場果樹部会事業推進部長）。

岡山市一宮地区

個別経営体の取り組み 1.5ヘクタールの生産基盤を目指して

【ほ場拡大の取り組み】

一宮選果場果樹部会の〇氏は、平成17年に就農し、親の経営継承を機に面積拡大に取り組みました。就農当初は50aの栽培でしたが、現在は70aの経営面積になっています。目標1.5haの経営を目指して園地の確保に取り組み、平成29年は新たに50aをもも園にするための園地整備に取り組みました。

【園地整備の狙い】

50aの園地には、もも栽培に適さない土壌が表面に露出している部分がありました。そこで、ももを植栽するに当たり、より適した土壌に改良するとともに、機械作業しやすい緩傾斜の果樹園となるように整備することにしました。



簡易整備の状況（もも栽培に適さない土が表面に出ていて、大きな石もたくさん埋まっていた）



簡易整備の状況（右側がもも栽培に適さない土、左側が新しく投入する土。表土を1m取り除き、新しい土を投入）

【概要】

| | |
|------|--------------------------------|
| メニュー | 農地の確保対策 |
| 事業主体 | 岡山市農協一宮選果場果樹部会 |
| 工種 | 客土、傾斜補正、苗木の植え付け |
| 労働力 | 30人日 |
| 費用 | 486千円 真砂土(200t) 重機等その他は自己資金 |



完成したもも園地（表土を入れ替え、大きな石を取り除き、傾斜を緩和した。）

岡山市・赤磐市（JA岡山東モモ部会管内）

晩生品種「白皇」導入による連続出荷

【地域の概要】

当地域は小盆地が連なる丘陵地帯で、もも栽培に適した花崗岩崩積土が広がっています。明治20年頃(1890年代)にもも栽培が始まり、「白桃」(現在栽培されている品種の祖先)や、昭和を代表する「大久保」などが発見されるなど、岡山県を代表する由緒ある産地として現在まで続いています。



J A岡山東モモ部会(413戸、104ha)は、平成17年2月、旧赤磐郡の3地域のもも産地が統合されて結成されました。山陽地区に県下3番目となる糖度センサーを装備した共同選果場を設け、統一的な出荷をおこなっています。

【産地の課題・取り組みの狙い】

(1) 選果対象品種の絞り込み

当初は選果対象が15品種と数多くありましたが、新品種として「千種白鳳」や「おかやま夢白桃」を導入するとともに、収穫期が重複する品種の淘汰を進め、現在11品種に絞り込まれています。さらに将来的には選果対象は9品種になる計画で、こうして淘汰された品種は新品種の導入により転換されています。

(2) ももの連続リレー出荷体制の実現

8月の盆明けから8月末までの2週間、選果場の稼働が停止する期間があり、選果場の運営面で懸案事項になっていました。

この空白時期(8月中旬～下旬)に出荷可能な県育成の新品種「白皇」を部会をあげて導入することを平成27年度に決定し、計画的な取り組みが始まりました。

白皇が導入されることで、6月中旬の日川白鳳から9月の黄金桃(ゴールデンピーチ)まで9品種による連続リレー出荷が可能となります。白皇を組織的に導入することで、まとまった出荷が期待でき、

市場や消費者へ向かって強く産地をアピールすることができます。また、盆明けに市場性のある品種ができることで、清水白桃に偏った品種バランスを分散し、担い手の規模拡大が図られると考えられます。

平成29年度 品種別出荷量(選果場)

| 品種名 | 出荷量(t) | 6月 | | 7月 | | 8月 | | 9月 | |
|---------|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | | 中旬 | 下旬 | 中旬 | 下旬 | 中旬 | 下旬 | 中旬 | 下旬 |
| 日川白鳳 | 3 | ① | | | | | | | |
| 橋場白鳳 | 2 | | | | | | | | |
| 加納岩白桃 | 10 | | ② | | | | | | |
| 白鳳 | 70 | | | ③ | | | | | |
| 千種白鳳 | 22 | | | | ④ | | | | |
| 清水白桃 | 112 | | | | | ⑤ | | | |
| おかやま夢白桃 | 40 | | | | | | ⑥ | | |
| 川中島白桃 | 5 | | | | | | | ⑦ | |
| 白龍 | 13 | | | | | | | | ⑧ |
| 白桃 | 2 | | | | | | | | |
| 白皇 | | | | | | | | | |
| 黄金桃 | 14 | | | | | | | | ⑨ |
| 合計 | 291 | | | | | | | | |

※ --- 平成30年度より選果対象から除外される予定

【概要】

| | |
|------|----------------------|
| メニュー | 品種構成対策 |
| 事業主体 | J A岡山東モモ部会 |
| 事業内容 | 「白皇」苗木750本（計画含む）の導入等 |
| 費用 | 2,220千円（平成28～29年度） |



県農業研究所の視察研修

【取り組み後の状況と今後の計画】

(1) 「白皇」の生産目標

事業により3年間で750本、5ha分の苗木を植栽する計画をたて、平成28、29年度事業で642本を植栽しました。平成30年度にも継続的に導入する見込みで、平成26、27年の事前導入や苗木業者からの直接購入を含めると、平成30年度末には900本、6.0ha規模の産地が形成されます。

こうした圧倒的な苗木導入数を根拠に平成32年度(2020年度)には、選果場の機械選果対象として本格出荷を目指しており、将来的には出荷量30～40t程度を見込んでいます。

(2) 「白皇」のブランド化推進と園地情報の集約

部会による組織的な取り組みによって、全体の6割(234名)が「白皇」を導入しており、より多くの部会員が植栽することで、産地の品種としてのイメージアップが図られています。今後、さらに産地を代表する品種へと成長させるため、市場、消費者へのアピールはもちろん、生産安定へ向けた技術向上にも積極的に取り組んでいきます。地元で県農林水産総合センター農業研究所があることを活かし、視察や試食研究会を適期に行っています。経験のない新品种への対応力が身につくよう、部会支部単位でも、J Aや農業普及指導センターが細やかな指導を行っています。

さらに、品種戦略と平行して、若手生産者の規模拡大や新規就農者の確保育成のため、園主の将来意向や品種等多様な情報を園地マップに集約し共有する取り組みを進めています。



「白皇」研究会



2023年度の品種別出荷見込み

【産地の声】

盆明けから「黄金桃」が出る8月末まで選果場が稼働しないことが課題でした。これからは「白皇」の出荷増大が見込まれ、早生から晩生まで途切れなくももが供給できるようになります。担い手確保へ向けた部会の取り組みも進んでおり、新規参入や若手の規模拡大につながることを期待しています。

「白皇」は、とにかく甘くて風味が良く、誰が食べても美味しいももです。産地の柱に育てていかなければなりません(部会長)。

倉敷市玉島北地区

園地整備による大規模化とももの高品質生産

【地域の概要】

倉敷市玉島北地区（J A岡山西玉島北園芸協会桃部会、296戸、108ha）は、県南西部に位置し、“晴れの国おかやま”に謳われるとおり温暖で日照時間が長く、台風等の天災が少ない恵まれた条件を活かし（年降水量1,028mm、年平均気温15.5℃）、ぶどう、もも、なしを基幹とする果樹栽培が古くから盛んな地域です。

特にももは明治27年から栽培が始まり、昭和40年代の構造改善事業による畑地かんがい設備の導入や、同60年代の葉たばこからの転換、平成以降は作業性を重視した水田転換による園地造成が進みました。



玉島北地区のもも園（開花期）

【産地振興プランの作成】

生産者の高齢化や後継者不足など産地の課題に対処するために、平成25年度に産地振興プラン（産地計画）を作成しました。その中でも特に新規栽培者の確保・育成、労働分散と長期安定出荷のための中生・晩生品種の推進、GAP導入推進に力を入れています。



水田転換園（客土後）

地下水位が高いため、1m以上の地上げを行い、暗渠を設置。

【大規模化の取り組み】

安定経営を目指した規模拡大のためには、作業性の良いほ場の確保に加え、機械化による省力化と複数品種の導入による収穫期間の拡大及び、病害や気象災害のリスク低減の対策が必要となります。そこで、当桃部会ではそれらを組み合わせた事業計画により産地の近代化、園地情報の集約（園地マップの作成）を進めています。

【概要】

| | |
|------|---|
| メニュー | 農地の確保対策、省力化対策、異常気象対策 |
| 事業主体 | J A岡山西玉島北園芸協会 |
| 事業内容 | 客土（2ほ場）、スピードスプレイヤー（2台）、防風網（1ha）、防蛾灯（56基）等 |
| 費用 | 17,000千円（平成28～29年度） |

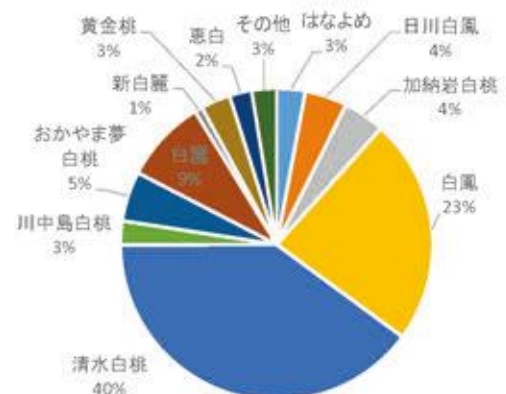


図 玉島北地区の品種構成(H28)

(1) 機械化と園地整備

大型省力機械（SS、高所作業車等）の導入を進め、1ha以上の経営体が産地の約4割の栽培面積を担っており、産地の発展に欠かせない存在になっています。また、新規参入者や若いUターン就農者も多く、規模拡大のための機械導入と園地整備が必須になっています。



スピードスプレーヤー



高所作業車

(2) 防風対策による正品率増加

丘陵地では南風の吹き上げ、水田転換園では風当たりが強く、スレ果の発生やせん孔細菌病等が発生する恐れがあります。特に盆以降に収穫期を迎える晩生品種では、防風対策と組み合わせた作付けを推進しています。



防風ネット（台風対策、病害予防に効果が期待できる）



防ガ灯（左：黄色蛍光灯、右：緑色LED）

(3) 環境に優しいももづくり

性フェロモン剤や防ガ灯の早期点灯を利用した殺虫剤の削減に取り組んでおり、省エネでより効果が高いLEDの防ガ灯の導入も始まりました。近年作付けを推進している晩生品種ではヤガ対策が特に重要です。

【取り組み後の状況と今後の計画】

若手生産者を中心に、園地整備や機械導入が進んでおり、平成27年に比べ出荷量が増えています。平成27年の台風11号通過後にせん孔細菌病が発生しましたが、防風ネットの設置及び防除を徹底し、被害は減少傾向にあります。

今後は、かん水設備や農道が整備されている園地等、将来にわたって維持すべき園地を担い手へ集積し、計画的な改植、耕作放棄地の再生利用等、効率的な生産体制を構築します。そのために必要な様々な情報は、地域の協力を得ながら園地マップへ随時集約するとともに、関係機関で共有し、産地の拡大や新規就農者の確保に向けた取り組みを進めているところです。

【地元の声】

実務研修生の受入れを始めたことで新規参入者が増えており、産地が活性化してきています。これからのもも経営を考える上で、計画段階から機械化による大規模化や、台風等による病害のリスク低減を考慮した園地づくりが重要です。

美作市・勝央町

既存ストックを有効活用したもも研修ほ場の整備

【地域の概要】

昭和 42～54 年の美作台地開発でまとまった畑地(526ha)とかんがい設備が整備され、産地基盤が完成しました。昭和 55 年頃から「白鳳」「清水白桃」等を中心にもも栽培が盛んな地域で、勝央町では約 12ha (35 戸)、美作市では約 5 ha (9 戸)で栽培されています。しかし、生産者の高齢化と担い手不足が進み、優良農地の未活用(約 200ha)が課題となっていました。



美作台地とかんがい設備

【取り組みの経緯】

地域内の後継者を待つだけでは産地を維持することが難しいことは明白であったため、地元が中心となって、地域外の研修生を受け入れ、将来の担い手確保に向けた取り組みの機運が高まりました。同時に園地の流動化に対応するため、地権者の意向を地図上に落とし込んで‘見える化’した「園地マップ」を作成し、関係者が情報共有できる仕組みを作りました。



地権者の意向を見える化した「園地マップ」

【研修生の受入】

勝央町桃部会では平成 22 年から研修生 3 名、勝田桃部会では平成 25 年から 4 名を受け入れましたが、実践的な栽培研修ができる農地の確保が喫緊の課題でした。しかし、地権者は面識の無い人に農地を貸すことへの抵抗があるため、利用されていなかった樹園地を農地中間管理機構が借り上げ、地元生産者へ運営委託する形で、新規就農希望者のための実践的な研修ほ場を整備する取り組みを平成 29 年度から開始しました。

地元生産者の尽力で地権者の了解を得て、園地の境界の段差の解消と、排水対策工事の自力施工により、スピードスプレイヤーや高所作業車等の機械化に対応した研修ほ場として園地をよみがえらせました。

【概要】

メニュー 研修ほ場の設置

事業主体 (公財) 岡山県農林漁業担い手育成財団 (岡山県農地中間管理機構)

工 種 美作市宗掛: 段差の除去、暗きょ設置、畝造成、土壌改良、苗木植付等 (6,456 m²)

勝央町石生・植月東: 枯死樹の伐採・抜根、土壌改良、苗木植付等 (3,663 m²)

費 用 1,170 千円 バックホー 2 台、ミニバックホー 1 台 (操作員込) の借り上げ、及び
種苗費、他



工事前（勝央町、枯死樹もあり雑草が繁茂）



工事後(勝央町、抜根した後に整地)



完成した研修ほ場（勝央町、生産力のある樹は残り、晩生品種を新規に植え付け）



完成した研修ほ場（美作市、地権者の同意を得て、園地の境界や段差を解消した）

【取り組み後の状況と今後の計画】

研修生が各ほ場を責任をもって管理することで、より実践的なもも園管理の研修ができるようになりました。今後も就農相談会や園地マップの活用を通じて、もも産地の担い手確保育成の取り組みをさらに加速させていきます。

【地元の声】

今回の整備では隣接ほ場の段差を解消するなどの改良を行い、非常に作業性の良いほ場に生まれ変わりました。樹が大きくなると今回のような大がかりな改良はできないので、植え付け前のほ場整備はととても重要です。

地権者や地元の方々の協力もあり、有効に事業を活用することができました。排水対策を行い、有効土層をきちんと確保することで生産性の高いもも園に整備でき、研修生の就農に向けた実践的な研修につながると期待しています。

新規就農希望者の窓口について

県外から移住し、岡山県で就農を希望する方にとって、本県を訪れる機会は少なく、就農後の生活をイメージすることが難しいため、生産者から直接話を聞くことや産地を訪れほ場を見学したり作業体験したりすることは、イメージを具体化する上でとても参考になります。

そこで、県では、関係団体等と連携し、県外就農相談会において果樹相談ブースの出展や大阪発着の産地見学バスツアーを実施しています。

【就農相談会】

県では関係団体等と連携し、県内外で就農相談会を開催しています。生産者の話が聞きたいという相談者の要望に応え、県外の相談会において、生産者が就農相談に対応するブースを設け、就農希望者に産地の概要や研修受入体制についてより具体的な説明を行っています。

相談者からは「年間の作業や必要な資金、機械の話をも直接聞くことができ参考になった」などの感想が聞かれました。



就農相談会（大阪）

【産地見学ツアー】

大阪を発着点にももやぶどう産地を見学するバスツアーを開催しています。産地見学では、産地の概要や研修受入体制の説明を行うとともに、研修制度を活用して就農した先輩や研修生と意見交換会を行っています。

参加者からは「実際のほ場を見ることができ、新規就農者の話を聞くことができ、イメージを具体化することができた」などの感想が聞かれました。



産地見学ツアー（総社市）

【今後の計画】

毎年、県内外から700件程度の就農相談があり、特に、岡山県の果樹栽培への関心が高く、多くの相談が寄せられます。今後も関係団体等と連携しながらこれらの活動を継続し、くだもの王国おかやまの将来を担う意欲ある担い手の確保に努めていきます。